

…手に入った(被爆者の方々の)手記を数百編、拝むようにして読み、そこからいくつかの切ない言葉を拝借して、あのときの爆心地の様子を想像しました。そして、それらの切ない言葉を再構成したのがこの戯曲『父と暮せば』です。そのときのわたしは、「これらの切ない言葉よ、世界中に広がれ」と何百回となく呟きながら書いていました。

井上ひさし

去年はコロナ禍の中で開催したかんのん劇場でしたが、皆さまからは「この時期によくやってくれた」というお言葉をたくさんいただきました。30回目となる今回は2004年10月の第8回に出演してくださった佐々木梅治さんに『父と暮せば』を再演していただきます。梅治さんは脚本のすべてを自分ひとりで演ずるという大胆な試みに取り組んで、既に200回以上公演してこられました。この17年の間に私たちの周りではいろいろな出来事がありましたが、特にコロナに翻弄され「いのち」と真剣に向き合わざるを得ない今こそ、一番観るべき舞台だと自信を持ってお勧めいたします。いよいよ円熟味をました梅治さんの語りに、あなたの感性と想像力はどうお応えになりますでしょうか？お仲間おさそいのうえ、ぜひご来場いただきたくご案内申し上げます。

かんのん劇場支配人 見城宗忠

『父と暮せば』

昭和20年8月6日広島。一瞬の閃光が父と娘の未来を変えた。3年後図書館に勤める生真面目な娘、美津江は愛する者たちを失い、自分だけが生き残ったことへの負い目に苦しみながら、ひっそりと暮らしている。ある日、彼女の前にひとりの青年が現れ互いに惹かれ合うが、幸せになることをためらって、自分の恋心を押さえつけ身を引こうとする。そんな姿を見て、お調子者の父、竹造は娘の背中を押そうとするが、その竹造、実は…

涙の中にもあたたかな笑いのある井上ひさしの傑作戯曲で、劇団こまつ座によってたびたび上演されている。また2004年には黒木和雄監督によって、宮沢りえ、原田芳雄、浅野忠信の出演で映画化された。

佐々木梅治 (ささきうめじ)



北海道置戸町生まれ。立命館大学卒業。1973年劇団民藝入団。民謡からシャンソン、茶道、狂言、クラシックバレエまで関心が高く、古典劇から現代劇まで幅広い役を演じている。宇野重吉一座の九州公演中、宇野の代役で14回『三年寝太郎』を務める。『夜明け前』『午後の子午線』『山神様のおくりもの』など外部出演も多数。特に2003年から取り組んでいる井上ひさし作『父と暮せば』のひとり語りは200ステージを超える。

その他声優としても「ゴッドファーザー」「野望の階段」「トイストーリー・2」「チャングムの誓い」(トックおじさん)、「コールドケース」(ボス)、「パイレーツ・オブ・カリビアン」「奇皇后」(ヨンチョル承相)「仮面の王イ・ソン」(ウ・ボ)「不滅の恋人」(ヤンアン大君)にレギュラー出演するなど、役柄によって多彩な声を聞かせている。